

市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

－ キャンプ・シュワブ内文化財調査報告書 －

平成 25（2013）年 3 月
名護市教育委員会

はじめに

本報告書は、名護市教育委員会が文化庁国庫補助を受けて平成 19 ～ 23 年度にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査のうち、在沖米軍海兵隊基地キャンプ・シュワブにおける文化財調査の成果をまとめたものです。

埋蔵文化財は、その地域の成り立ちや文化を考える上で必要不可欠なものであります。本報告書が名護市の歴史を知る上での基礎資料として、多くの方々に活用されますとともに、市民の方々が地域に残された文化財の保護・活用に更なる関心を寄せていただき、文化のまちづくりのための一助となれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、本業務を実施するにあたり多くの方々に協力を頂きました。特に、埋蔵文化財の記録保存にご理解・ご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。刊行のあいさつとします。

平成 25 (2013) 年 3 月

名護市教育委員会
教育長 座間味 法子



巻頭図版 1. 調査地航空写真



卷頭図版 2. 宿道跡



1. 宿道跡



2. 宿道跡

巻頭図版 3. デークニヤマ周辺の陸上交通遺構（1 地点）



1. 耕地跡



2. 畝跡

巻頭図版 4. デークニヤマの生産関連遺構群 (7 地点)



1. 谷間沿いの平場跡及び掘削坑



2. 谷間沿いの平場跡及び切土遺構

巻頭図版 5. デークニヤマの生産関連遺構群（7 地点）



1. 大浦崎収容所跡造成面



2. ヤニバマ遺物散布地近景

巻頭図版 6. キャンプ地区調査状況

例 言

1. 本報告書は、平成 19 ～ 23 年度に文化庁国庫補助を受けて実施した市内遺跡詳細分布調査のうち、在沖米軍海兵隊基地キャンプ・シュワブ施設内において実施した文化財分布調査の成果を収録したものである。
2. 調査地は、沖縄県名護市字辺野古に所在する。
3. 基地施設内への立入り際には、在沖米海兵隊基地普天間飛行場代替施設事業管理事務所及び沖縄防衛局企画部移設整備課の協力を得た。
4. 本書掲載の地形図は、名護市役所発行の 1/10,000、1/25,000 地形図を使用した。
5. 本事業における体制は、第 I 章第 2 節に記す。
6. 本書の執筆及び編集は、宮城智浩が担当した。
7. 本書掲載の図・表は宮城智浩・真栄田義人・仲村美代子・宮里牧・岸本美枝子で作成した。
8. 本事業において、下記の方々のご協力・ご教示を賜ったので記して謝意を述べる。
自然科学分析 バリノ・サーヴェイ株式会社
9. 調査で得た図面・写真等各種記録及び遺物は全て名護市教育委員会文化課文化財係において保管している。

凡 例

1. 本書掲載の現況測量等における座標は日本測地系第 15 系を使用している。また、断面における基準高は海拔高を用いている。
2. 現況測量図や土層図等の縮尺は適宜設定している。
3. 土層及び遺物観察で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帳』を使用した。
4. 本書における先史時代の時代区分は、沖縄現行編年を用いた。
5. 参考文献は、巻末に記載した。

本文目次

はじめに	i
巻頭図版	ii
例言・凡例	viii
本文・目次	ix
図・写真・表目次	x
第Ⅰ章 調査経緯	1
第1節 調査の目的及び経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 調査地域の位置と環境	8
第1節 名護市の位置と概要	8
第2節 辺野古区の地理的・歴史的環境	9
第Ⅲ章 調査の方法	15
第1節 調査区及びグリッドの設定	15
第2節 調査の方法	15
第3節 時代区分について	18
第Ⅳ章 調査結果	20
第1節 キャンプ地区	20
第2節 シュワブ訓練地区	30
第Ⅴ章 総括	50
第1節 キャンプ地区における先史時代(貝塚時代)遺跡	50
第2節 美謝川集落関連遺跡群	50
第3節 大浦崎収容所跡	51
おわりに	51
引用・参考文献	52
報告書抄録	53

挿図目次

第1図. 沖縄本島及び名護市の位置図	7
第2図. 名護市における地形大区分	8
第3図. 名護市の標高分布高度	9
第4図. 辺野古区の小字	9
第5図. 調査区周辺の地質	10
第6図. 調査区周辺の植生	10
第7図. 調査区周辺の小地名	13
第8図. 調査区周辺の美濃川居住配置図	13
第9図. 久志地区における辺野古区以南の文化財 分布図	14
第10図. 地区割	16
第11図. 調査区位置図	17
第12図. キャンプ地区における調査状況	19
第13図. 昭和57年度当時の大又遺跡断面 見取り図	22
第14図. ヤニバマ遺物散布地出土遺物	25
第15図. TP49 東壁	25
第16図. 大浦崎収容所捕虜収容状況	26
第17図. 大浦崎収容所跡平面図	27
第18図. シュワブ訓練地区における調査実施状況	29
第19図. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (6地点)	34
第20図. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (7地点)	36
第21図. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (8地点)	38
第22図. フクチピラ周辺の土塁及び溝状遺構	40
第23図. フクチピラ周辺の生産関連遺構群	43
第24図. 思原の陸上交通遺構及び猪垣跡	44
第25図. セイネンチ周辺の生産関連遺構	46
第26図. セイネンチ周辺の陸上交通遺構	47, 48
第27図. ナガスジ周辺の平場跡	49

図版目次

図版1. ヤニバマ遺物散布地出土遺物	25
--------------------	----

写真目次

写真1. 平成19年度調査風景	4
写真2. 平成20年度調査風景	4
写真3. 平成21年度調査風景	5
写真4. 平成22年度調査風景	6
写真5. 平成23年度調査風景	6
写真6. 思原遺跡試掘調査	21
写真7. 大又遺跡調査	22
写真8. 思原石器出土地調査	23
写真9. ヤニバマ遺物散布地試掘調査	24
写真10. 大浦崎収容所跡	28
写真11. デークニヤマ周辺の陸上交通遺構	30
写真12. フクチピラの陸上交通遺構	31
写真13. 上福地原の猪垣跡	31
写真14. 上福地原の平場跡	32
写真15. デークニヤマの生産関連遺構群 (5地点)	32
写真16. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (6地点)	33
写真17. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (7地点)	35
写真18. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群	37
写真19. 下福地原の陸上交通遺構	39
写真20. フクチピラ周辺の土塁及び溝状遺構	39
写真21. フクチピラ周辺の生産関連遺構群 (1/2)	41
写真22. フクチピラ周辺の生産関連遺構群 (2/2)	42
写真23. 思原の陸上交通遺構及び猪垣跡	44
写真24. セイネンチ周辺の生産関連遺構群及び 陸上交通遺構 (1/2)	45
写真25. セイネンチ周辺の生産関連遺構群及び 陸上交通遺構 (2/2)	46
写真26. ナガスジ周辺の平場跡	49

表目次

表1. 名護地域の間切から名護市への変遷	12
表2. 久志地区の各村名の変遷	12
表3. 時代区分表	18
表4. 土器観察表	24
表5. 貝製品観察表	25

第 I 章 調査経緯

第 1 節 調査の目的及び経緯

本市における遺跡分布調査は、昭和 54（1979）～ 56（1981）年度にかけて行われ、『名護市の遺跡（2）』（1982）として刊行された。以後約 30 年の歳月が経過する中で、新たに発見されたものを含めると、現在約 80 箇所の遺跡及び遺物散布地が確認され、中には開発行為などによって記録保存調査を余儀なくされた遺跡もある。今後もそのような事例が起こることが予想されることから、諸開発との円滑な調整及び埋蔵文化財の保護を図るため、これまでの予備調査で把握されている遺跡及び遺物散布地の残存範囲や状況、帰属時期及び遺跡の性格等について実態の把握及び資料整備が必要不可欠である。

以上の状況から、本市では平成 18（2006）年度以降、調査体制の整備・充実を図るとともに、平成 19（2007）年度より文化庁国庫補助を得て、市内における遺跡詳細分布調査に着手した。今回の調査では、開発の予想される地域及びキャンプ・シュワブを中心に埋蔵文化財及び開発に伴う試掘・確認調査を行うとともに、過去の未踏査区域における基礎情報の収集を主な目的とした。

第 2 節 調査体制

平成 19（2007）～ 24（2012）年度における文化財調査及び報告書作成は以下の体制で実施した。

平成 19（2007）年度

事業主体	名護市教育委員会（所管：文化課）		
事業責任者	教 育 長	稲嶺 進	
	教 育 次 長	具志堅 満昭	
事業総括	文 化 課 長	島福 善弘	
事業事務	文 化 財 係 長	比嘉 久	
	文化財係嘱託員	神谷 祐子	
調査担当者	文化財係主事	仲宗根 禎	
	文化財係学芸員	亀川 彰子	
	〃	宮城 智浩	
調査補助員	文化財係嘱託員	岸本 卓巳	
発掘作業員	桑江 勇・徳嶺 朝暉・渡口 京子・渡口 政治・山城 政則		

（氏名五十音順 / 以下同様）

平成 20（2008）年度

事業主体	名護市教育委員会（所管：文化課）		
事業責任者	教 育 長	稲嶺 進	
	〃	比嘉 恵一	
	教 育 次 長	具志堅 満昭	
	事務局 参事	中本 正泰	
事業総括	文 化 課 長	島福 善弘	

事業事務	文化財係長	比嘉 久
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調査担当者	文化財係主事	仲宗根 禎
	文化財係学芸員	松原 彰子
	"	宮城 智浩
調査補助員	文化財係嘱託員	岸本 卓巳
発掘作業員	桑江 勇・徳嶺 朝暉・徳嶺 朝直・渡口 京子・渡口 政治	
	屋部 計・山城 政則	

平成 21 (2009) 年度

事業主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)	
事業責任者	教 育 長	比嘉 恵一
	教 育 次 長	中本 正泰
事業総括	文 化 課 長	島福 善弘
事業事務	文化財係長	仲宗根 禎
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調査担当者	文化財係学芸員	松原 彰子
	"	宮城 智浩
発掘作業員	徳嶺 朝暉・徳嶺 朝直・渡口 京子・渡口 政治・仲程 源信	
	屋部 計・山城 政則・湧川 博弥	
現場調査協力	井上 浩彰 (文化財係嘱託員)	

平成 22 (2010) 年度

事業主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)	
事業責任者	教 育 長	比嘉 恵一
	教 育 次 長	中本 正泰
事業総括	文 化 課 長	島福 善弘
事業事務	文化財係長	仲宗根 禎
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調査担当者	文化財係学芸員	松原 彰子
	"	宮城 智浩
調査補助員	文化財係嘱託員	井上 浩彰
発掘作業員	石川 博利・大城 正治・下地 省三・玉木 健二・田港 朝孟	
	太良 義一・仲程 源信・山城 政則	
資料整理作業員	石川 マサミ・岸本 美枝子	

平成 23 (2011) 年度

事業主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)	
事業責任者	教 育 長	比嘉 恵一
	"	座間味 法子
	教 育 次 長	渡具知 武美

事業総括	文化課長	島福 善弘
事業事務	文化財係長	仲宗根 禎
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調査担当者	文化財係学芸員	松原 彰子
	"	宮城 智浩
	"	稲福 英希
発掘作業員	上地 厚行・金城 善紀・田港 朝孟・太良 義一・仲程 源信 仲村 徹明・山城 保・山城 政則	

平成 24 (2012) 年度

事業主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)	
事業責任者	教 育 長	座間味 法子
	教 育 次 長	渡具知 武美
事業総括	文化課長	島福 善弘
事業事務	文化財係長	友寄 凡子
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調査担当者	文化財係学芸員	宮城 智浩
	〃	宮城 弘樹
調査補助員	文化財係嘱託員	真栄田 義人・仲村 美代子・宮里 牧
資料整理作業員	岸本 美枝子	

第 3 節 調査経過

調査実施年度における作業経過を以下に整理する。

平成 19 (2007) 年度

概要 初年度における調査は、周知の遺跡が分布する南海岸部を含む国道 329 号以南のキャンプ地区を対象区域として調査を実施した。平成 19 年 7 月に表面踏査に係る米軍施設内への立入りに関する調整を行い、同年 8 月に試掘調査箇所の選定のための表面踏査を実施した。その結果を基に試掘調査箇所を決定し、再度米軍施設内への立入りに関する調整を行い、平成 20 年 2 月 1 日より調査に着手した。対象区域において 31 箇所の試掘坑 (T.P.1 ～ 31) を設けて調査を実施し、同年 3 月 28 日に平成 19 年度の調査を終えた。

平成 19(2007)年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
諸準備												
文化財調査												
資料整理												



1. 表土除去作業風景

写真 1. 平成 19 年度調査風景



2. 発掘作業風景

平成 20（2008）年度

概要 当該年度における調査は、キャンプ地区における前年度の調査対象区域を除いた地域を対象として調査を実施した。平成 20 年 12 月に調査に係る米軍施設内への立入りに関する調整を行い、平成 21 年 1 月 19 日より調査に着手した。調査対象区域において 27 箇所の試掘坑（T.P.32～58）を設定し調査を実施した。また、グリット設定と並行して実施した踏査において戦時中の収容所とみられる造成地を確認したため、外部委託による地形測量を行い、同年 3 月 30 日に平成 20 年度の調査を終えた。

平成 20(2008) 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
諸準備												
文化財調査												
資料整理												



1. 伐採作業風景

写真 2. 平成 20 年度調査風景



2. 発掘作業風景

平成 21 (2009) 年度

概要 当該年度における調査は、国道 329 号より内陸部のシュワブ訓練地区内の辺野古ダム周辺域を対象区域とした。平成 21 年 11 月～12 月にかけて調査に係る米軍施設内への立入りに関する調整を行い、平成 22 年 1 月 14 日より調査に着手した。調査では、以前実施した踏査によって一部が確認されていた宿道を中心に調査を行った。調査では、宿道の他に屋敷集落に関連するとみられる遺構等が確認され、それらの遺構を写真による記録と測量による正確な位置情報の記録を行い、同年 3 月 26 日に平成 21 年度の調査を終えた。なお、測量は外部委託によって実施した。

平成 21(2009) 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
諸準備												
文化財調査												
資料整理												



1. 伐採作業風景



2. 遺構面検出作業風景

写真 3. 平成 21 年度調査風景

平成 22 (2010) 年度

概要 当該年度における調査は、前年度に引き続きシュワブ訓練地区内の辺野古ダム周辺域を対象区域とした。平成 22 年 12 月～翌年 1 月にかけて調査に係る米軍施設内への立入りに関する調整を行い、平成 23 年 1 月 18 日より調査に着手した。まず最初に調査対象地区における踏査を実施し、確認された遺構等の写真による記録と測量による遺構の残存状況の記録を実施した。また、耕作地とみられる遺構において計 3 箇所の試掘坑 (T.P.59～61) を設定し、試掘調査を実施した。掘削後、壁面の実測を行い、埋戻しをして同年 3 月 28 日に平成 22 年度の調査を終えた。なお、遺構の測量は外部委託によって実施した。

平成 22(2010) 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
諸準備												
文化財調査												
資料整理												



1. 伐採作業風景



2. 発掘作業風景

写真 4. 平成 22 年度調査風景

平成 23（2011）年度

概要 当該年度における調査も平成 21～22 年度に引き続きシュワブ訓練地区内の辺野古ダム周辺域を対象区域とした。平成 23 年 12 月から翌年 2 月にかけて調査に係る米軍施設内への立入りに関する調整を行い、平成 24 年 2 月 9 日より調査に着手した。前年と同様に対象区域における踏査を実施し、確認された遺構等の写真による記録と測量による遺構の残存状況の記録を実施し、同年 3 月 28 日に平成 23 年度の調査を終えた。なお、遺構の測量は外部委託によって実施した。

平成 23(2011) 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
諸準備												
文化財調査												
資料整理												

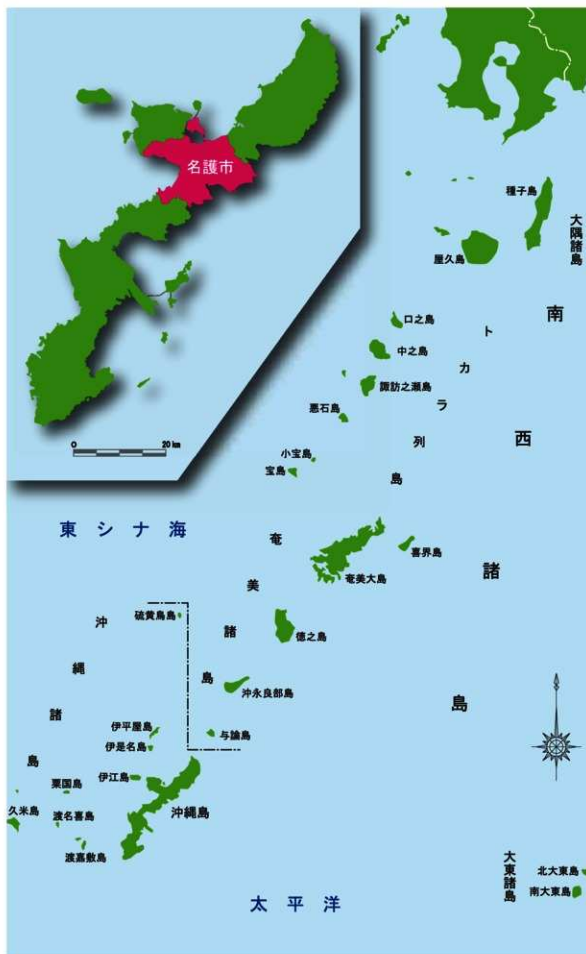


1. 遺構検出作業風景



2. 遺構記録作業風景

写真 5. 平成 23 年度調査風景



第1図 沖縄本島及び名護市の位置図

第Ⅱ章 調査地域の位置と環境

第1節 名護市の位置と概要

1. 位置と地勢

名護市は、沖縄本島北部に位置し、昭和45(1970)年8月1日に旧名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村の1町4村が合併し誕生した。市域の北東部は大宜味村と東村、西部は今帰仁村と本部町、南部は恩納村と宜野座村の1町5村と隣接している。県都那覇市から北に約64kmの距離にあり、国道58号、国道329号及び沖縄自動車道によって結ばれている。沖縄の空の玄関口である那覇空港からは、沖縄自動車道を使用して車で約1時間を要する。

総面積は210.37km²(平成24年12月29日現在)で、県内でも竹富町(334.02km²)、石垣市(229km²)に次ぐ面積を誇り、その約60%を山林が占める。市域の西部は険しい山々を有する屋部地区、北部は稲作で知られた羽地地区や塩田で知られた屋我地地区、東部は山間部が美しい久志地区、中央部には平野と丘陵が広がる名護地区と変化に富んだ景観を有する地域からなる自然豊かな市である。市域の中央には、名護岳(345.2m)を中心に標高300m級の山々が連なり起伏の大きい丘陵地を形成し、そこに降った雨を集めて源河川、羽地大川、我部祖河川、汀間川、大浦川などの中小の多くの川が流れる。山間部から流れてきた川の河口付近には沖積平野が形成され、そこに集落が形成される。この集落の後背湿地は、近世以降水田として利用され、山、海ともに個性豊かな山原型の土地利用が形作られてきた。

人口は61,659人、世帯数は26,928世帯を数え(平成24年12月29日現在)、55行政区から構成されている。

2. 地形と地質

本市の地形は大きく①本部半島部、②脊梁山部、③両者に挟まれた丘陵地と屋我地地区の3つに分けることができる。

本部半島部は、嘉津字岳(標高448m)、八重岳(453m)、安和岳(標高432m)などの本部半島にある高い山々を含む地域である。この地域は、表層地層が古い時代の地層で構成されるため、谷が発達し山々の傾斜が大きい地形を形成する。表層地層は、灰色石灰岩、チャート、黒色千枚岩～黒色頁岩を主体とした古生代二疊紀～中生代末期の本部層や与那嶺層、湧川層が分布する。

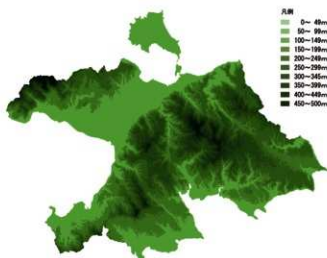
脊梁山部は、名護岳(標高345.2m)、多野岳(標高385.2m)、久志岳(標高335m)、辺野古岳(標高332m)などの沖縄島の脊梁山を形成する地域である。辺野古区もこの地域に含まれる。この脊梁山を形成する沖縄島の島軸は、北東-南西の軸を持ち、山々や丘陵の高さにおいて北側に高く、南側に低い傾向がある。この地域は、国頭群層(名護層、嘉陽層)からなる地形であるが、局部的に国頭礫層で構成される段丘面の発達がみられる。その傾向は東海岸において顕著である。段丘面より海側では、山地が海岸へ急角度で接するが



第2図 名護市における地形大区分

※宮城 勉「名護市の地形」『名護市の自然』2003より抜粋、再トレース

その高さも北側では急斜面をなし、南側に行くほど傾斜は弱くなる。表層地質は、黒色頁岩～黒色千枚岩、緑色岩類、褐色砂岩層と黒色頁岩層を主体とする名護層や嘉陽層が分布する。丘陵地域と屋我地地域は、市の西部に広がるなどかな低い丘陵を形成する地域に屋我地島を加えた地域である。丘陵地域は、本部半島部の古い時代の岩石と脊梁山地部を作る国頭層群との間を埋めるように堆積した礫層を中心になだらかな低い丘陵で



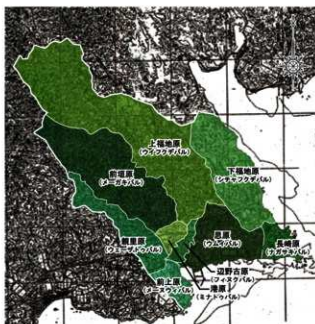
第3図 名護市の標高分布高度

名護地峡を形成している。我部祖河～振慶名～田井等に広がる平野は、古くから人工的な土地の平坦化が行われ、水の豊かな水田地帯として「ハネジターブックワ」と呼ばれた。表層地質は、我部礫層や国頭礫層が表層地質の主体となって分布し、局所的に仲尾次砂層、琉球層群の那覇石灰岩や石灰質砂層などがみられる。更には、与那嶺層とみられる千枚岩や石灰岩が宇茂佐にみられる。また屋我地地域では、与那嶺層の千枚岩や石灰岩、チャートなどがみられる。

第2節 辺野古区の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

辺野古区は、方言で「ヒヌク」と呼ばれる旧久志村に属したムラで、名護市街地から南東へ12kmの距離にある本島東海岸に位置し、総面積（10.83km）の大半は在沖米軍施設によって占められている。区域の東側には大浦湾を抱く海岸段丘の長崎が突出し、地先には長島と平島の無人島が浮かび、長崎の突端を起点に半円形にサンゴ礁の発達したリーフ群（イノー）が形成され、更に南西方向へ帯状に延びる。また、区域には久志岳と辺野古岳を水源とする辺野古川と福地川（美謝川）が流れ、前者が太平洋へ、後者は大浦湾に注ぎ出る。川の河口には沖積層が分布し、それ以外

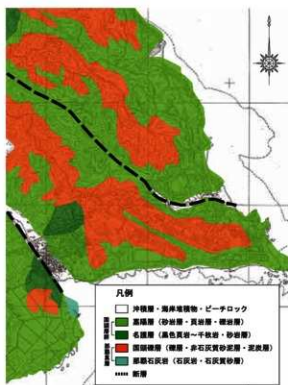


第4図 辺野古区の小字

外の地域には嘉陽層や国頭礫層などが分布する（第5図参照）。植生は、集落と基地施設が分布する地域を除くとそのほとんどがイタジイなどの山地林とリュウキュウマツ二次林で占められる（第6図参照）。

集落は、辺野古川下流の辺野古原に立地する。川の河口北東側の中でも河口に近い沖積層

(砂地)の平坦地に立地するのが旧部落で、クシヌウタキを背にして放射線状の集落形成がみられる。また、クシヌウタキの北側の台地に立地するのは、戦後、米兵相手の商店や飲食街が形成された新部落又は新聞地で、かつては基地の街として賑わいをみせていた。旧部落の住民は、自らを下部落、他を上部落と呼び区別している。集落の北側には国道329号が通り、宜野座村から世富慶区へ繋がる横断道路となっている。



第5図 調査区周辺の地質



第6図 調査区周辺の植生

2. 歴史的環境

先史時代（貝塚時代）

辺野古区では、現在までに思原遺跡、大又遺跡、思原長佐久遺物散布地、思原石器出土地の4遺跡が確認されている。その全てがキャンプ・シュワブの施設内に分布しており（思原遺跡のみ一部基地外に広がる）、詳細な調査は実施されていない。過去の試掘調査で得られた土器などから、これらの遺跡は貝塚時代後期（約2,000～1,000年前）に属するものとみられる。

グスク時代～近世

辺野古の発祥地は、現集落が立地する辺野古原の西側に位置する親里原（ウェーザトゥバル）と伝えられるが、集落が移動した時期は定かではない。

文献史料に辺野古の関連記事を認めるのは17世紀以降で、王府によって各村々の石高を田畑別に記録した『琉球国高究帳』（1635）や『絵図郷村帳』（1649）において平仮名で「金武間切へのき村」と記されているのがみえる。また、『琉球国辻之帳』（1717）では「邊野湖」、琉球最古の総合地誌『琉球国由来記』（1713）においては「邊野古」と記され、以後一貫して漢字表記されていく（表2参照）。『琉球石高究帳』によると、石高は43.7石余（田40.9石余、畠2.9石余）で、水田の比率の高い村であったことがうかがえる。

琉球王府時代の辺野古は、金武間切に属し金武王子尚久の領地として統治され、俗に久志・

辺野古と連称されていた。延宝元（1673）年になると、金武間切から久志・辺野古の二村と名護間切より大浦以北の十箇村（現東村）を分割して久志間切を創設し、按司地頭に豊見城王子朝良（尚経）と久志親方助豊（頼思敬）が任じられ、両惣地頭の領邑となった。また、政治と祭事を体系的に進める王府は辺野古を久志ノ口管轄下に置いた。

『琉球国絵図』（1646 年）によると、王府時代の陸路交通として首里城を発し沖縄本島の東海岸に沿って「東海道」が北上し、12 番目の一里塚の印がちょうど「辺野古の一里塚」にあたる。一里塚は、ムラの北東の丘陵地に構築されていたが、国道 329 号の改良工事に伴い現在は国道沿いの集落入口に移築されている。また、海路は天然の良港として大浦湾と並ぶ辺野古港があり、東海上を航海する山原船や漁船の寄港地としても知られ、平安座・泡瀬・与那原船籍が往来する津口になった。

近現代

明治時代に入ると、小字上福地原と下福地原を流れる福地川沿いを中心に、ヤニ、鍋護（小字名）の散村を単一集落とした俗称「美謝川（ミージャーガ）」と、小字長崎原や前上原にて屋取集落が離れて形成されるようになる。特に美謝川の屋取集落は、昭和 12（1937）年頃には行政区をつくる程に人口が増加していった。美謝川への入植は、明治時代中期に屋部・本部・今帰仁・中頭方面に一時寄留していた人々が、新天地を求めて山居したのがほとんどである。これらの屋取集落は、戦後の土地接収に伴い移住させられた。

大正時代になると、それまで不便であった陸上交通の開発が行われるようになる。大正 11（1922）年に世富慶～美謝川～スギンダ（現二見）間の郡道工事が行われたが、辺野古区が工事を請け負ったことにより、字有財産を処分する程の財政難に陥った。また、個人の負債も莫大になり、その後本土への出稼ぎ者が急増した。郡道は、大正 14（1925）年に開通し、昭和 2（1927）年には二見から瀬嵩まで開通し、東海岸と西海岸の往来が飛躍的に便利になった。また、昭和 12（1937）年には久志から辺野古を通る県道建設が始まり、それまで木橋だった辺野古橋がコンクリートに架け替えられた。県道が整備されるまでは、鍋護の浜から渡し舟で対岸の瀬嵩まで渡ることができた。

昭和 17（1942）年には、辺野古区と久志区の一部が豊原区として区分し、現在の区域となる。沖縄戦末期になると長崎原に米軍駐留部隊基地を設け、思原と下福地原には本部・今帰仁・伊江の町村民を収容するための大浦崎収容所が設置された。戦時中、久志地区は中南部からの疎開者・避難民を多く受け入れていたため、終戦後の収容所生活時期には、瀬嵩市と久志市の区域に分けられたが、収容所に拘留されていた人々の帰村が許されると人口は激減し、昭和 21（1946）年 3 月には再び久志村に改称された。

大浦崎収容所の跡地には、昭和 32（1957）年からキャンプ・シュワブが建設され、辺野古岳・久志岳一帯の山々はその演習場となって現在に至る。基地建設が始まって以降、建設に従事する人々、そして米兵を相手にする民間の諸施設が建てられ、集落の東側の台地に新しく「基地の街」が形成された。1960 年代のベトナム戦争時をピークに、近年は活気を失いつつある。

辺野古区が属した久志村は、昭和 45（1970）年 8 月 1 日に旧名護町・屋部村・羽地村・屋我地村の 1 町 3 村と合併し現在に至る。

表1 名護地域の間切から名護市への変遷

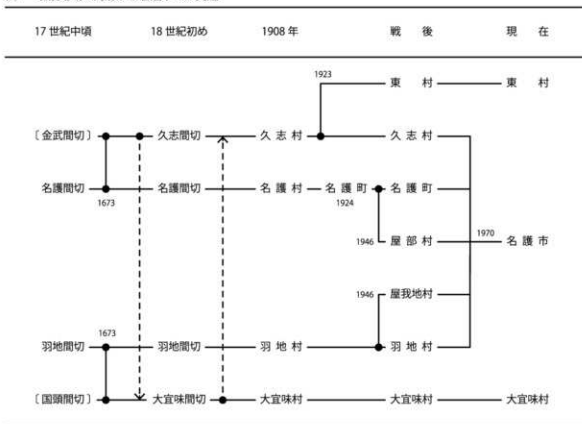
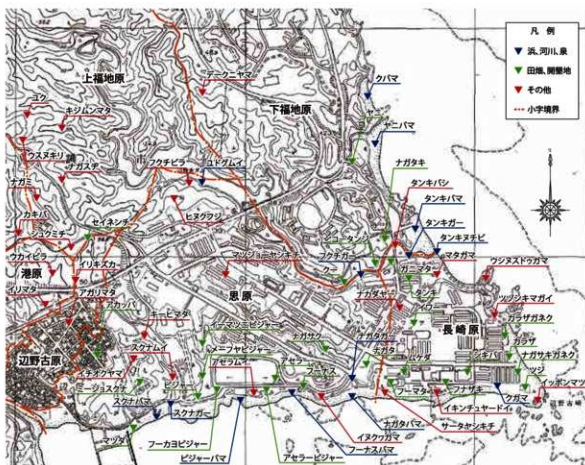
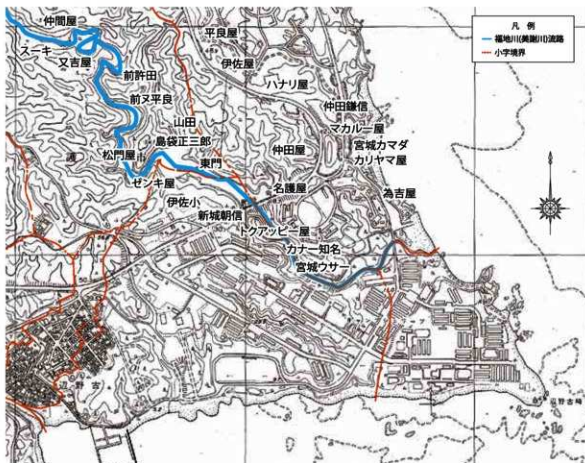


表2 久志地区の各村名の変遷

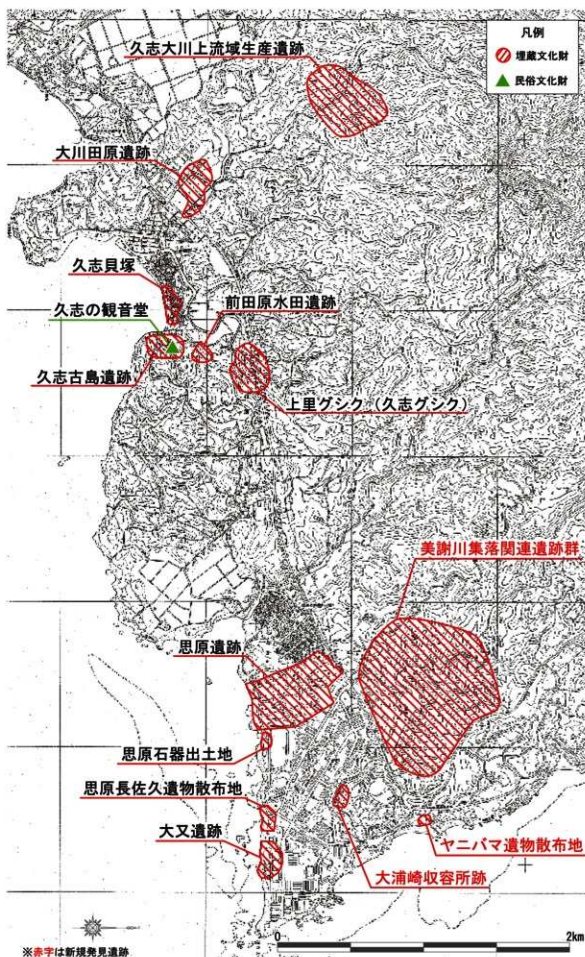
徳富村 郷 (17世紀中頃)	徳富 高良郷 (17世紀中頃)	徳富 由良郷 (1713)	中山 佐 徳富 郷 (1721)	徳富 郷 日 記 (1731)	戦 後 二 年 地 (1737)	間切村 名 目 (1806)	地事沿革 (1742～64)	徳富郷 郷 記 (1823)	沖徳富 郷計帳表 (1880)	近代～現代	現在の 行政区 (市)
(くし)	(くし)	久志	久志	久志	久志	久志	久志	久志	久志	久志	久志
											豊原
(へのき)	(へのき)	辺野古	辺野古	辺野古	辺野古	辺野湖	辺野湖	辺野古	辺野古	辺野古	辺野古
											二見
おほら 上おほら	おほら	大浦	宇直良	大浦	大浦	大浦	大浦	大浦	大浦	大浦	大浦
											大川
せたけ	せたけ	瀬高	瀬高	瀬高	多嘉山	瀬高	瀬高	瀬高	瀬高	瀬高	瀬高
てま かてかる	てま	汀間	汀間	汀間	汀間	汀間	汀間	汀間	汀間	汀間	汀間
											三原
あぶ	あぶ	安部	一	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部
かやう	かやう	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋
											底仁屋
てぎな	てぎな	天仁屋	松浜	天仁屋	天仁屋	天仁屋	天仁屋	天仁屋	天仁屋	天仁屋	天仁屋



第7図 調査区周辺の小地名



第8図 調査区周辺の美謝川居住配置図



第9図 久志地区における辺野古区以南の文化財分布図

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 調査区及びグリッドの設定

今回の調査では、名護市字辺野古に所在するキャンプ・シュワブを対象に文化財分布調査を実施した。キャンプ・シュワブは、国道329号より海岸側の「キャンプ地区」と内陸部の「シュワブ訓練地区」から構成される。調査を進めるにあたりそれらの地区を調査単位として設定し、調査を実施した。

調査区内におけるグリッド設定は、名護市域を交差する座標軸（X・Y軸）を5km毎のグリッドに区切り第Ⅰ区画とし、階層的に第Ⅴ区画まで設定した（第10図参照）。

第Ⅰ区画：名護市域を5km毎のグリッドに区画し、「1～19」の数字で表記。

第Ⅱ区画：5km四方のグリッドを1km毎のグリッドに区画し、「A～Y」のアルファベットで表記。

第Ⅲ区画：1km四方のグリッドを100m毎のグリッドに区画し、「1～100」までの数字で表記。

第Ⅳ区画：100m四方のグリッドを20m毎のグリッドに区画し、「ア～ノ」までの片仮名で表記。

第Ⅴ区画：20m四方のグリッドを4m毎のグリッドに区画し、「1～25」までの数字で表記。

第2節 調査の方法

今回の調査を実施するにあたり、キャンプ地区では埋蔵文化財の分布及び大浦崎収容所関連遺構を確認することに、シュワブ訓練地区では美謝川集落及び琉球王府時代に整備された宿道を確認することに主眼を置いた。そのため、各地区ごとにそれぞれ異なる方法で調査を進めた。

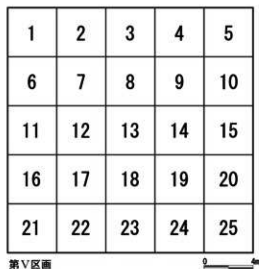
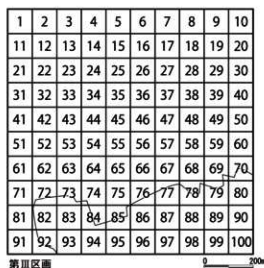
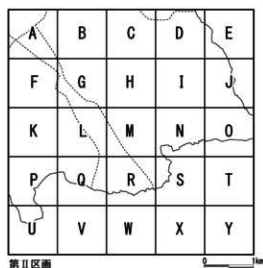
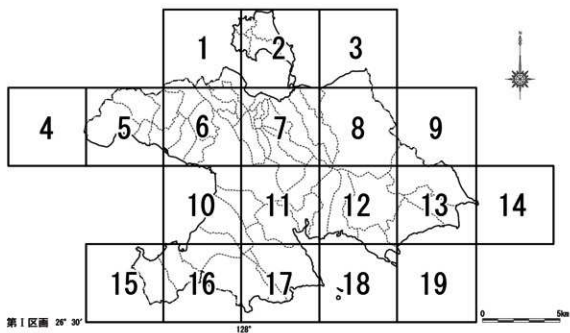
以下、各地区についての調査方法を述べる。

1. キャンプ地区

本地区は、過去の文化財分布調査から南側海岸沿いにおいて埋蔵文化財が分布していることがわかっていて、また、市史編さん室（現市史編さん係）による聞き取り調査から、沖縄戦末期から戦後にかけて大浦崎収容所が設置されていたこともわかっていて、これらのことから、本地区における文化財分布調査は、埋蔵文化財の分布状況及び大浦崎収容所関連遺構を確認することに主眼を置いて調査を進めた。

本地区は、基地建設による地形改変が進んでいるため、まずは基地施設の建設されていない場所において踏査を行い、第Ⅴ区画のグリッドを設定する場所の選定を行った。踏査の際に大浦崎収容所関連遺構などを確認した場合は、外部委託による地形測量を実施した。グリッドの設定場所が決まると、その中に1m×4mを最小単位とする試掘坑を設けて掘削を実施した。なお、試掘坑を設定する際には、必要に応じて雑草雑木の除草・伐採を行った。試掘坑における表土及び客土の除去は、基本的に重機を用いて行うこととしたが、重機の搬入が困難な場所については人力による除去を行った。表土及び客土の除去後に遺物包含層が確認された場合は、人力による掘削に切り替えて遺物及び遺構の検出を行うこととした。また、遺物が検出された場合は、グリッド単位で層ごとに切り上げることとした。

掘削を終えた試掘坑においては、1/10スケールを基本とする壁面実測を行い、その後土壌サンプルを各層ごとに採取し埋戻しを行った。今回の調査では、基地施設内での調査とい



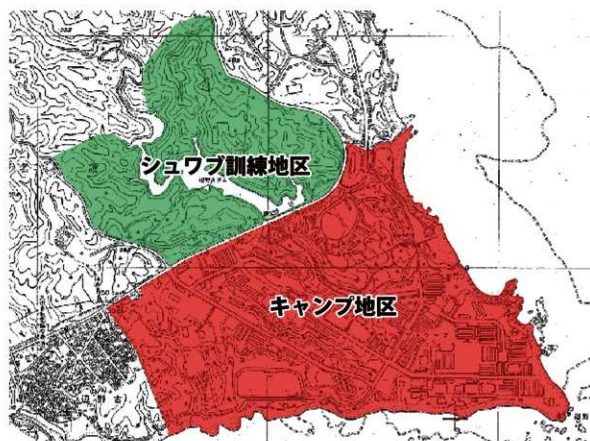
第10図 地区割

うことで、基本的に1日で掘削から埋戻しを行うこととした。そのため、掘削を実施することのできる試掘坑の数は1日1～3箇所程度であった。採取した土壌サンプルについては、現場調査では必要に応じて自然科学分析を外部委託した。

写真撮影については、試掘坑設定後や掘削後、壁面清掃後及び土壌サンプル採取後などにその状況を35mmカメラ（白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルム）及びデジタル一眼レフカメラ（RAW及びJPEG）にて撮影した。また、必要に応じてその都度写真撮影を行った。また、遺構が確認された場合は、遺構の全景及び近景を可能な範囲で撮影した。

2. シュワブ訓練地区

本地区は山岳・森林地帯からなる。本地区には、戦後まで屋取集落である美謝川集落があったことと、琉球王府時代に整備された宿道のルートの一部であったことから、それらに関連する遺構を確認することに主眼を置いて調査を進めた。まずは、過去の資料を基に宿道等の遺構が残存する可能性の高い地域の踏査を行い、その後その他の地域における踏査を行った。確認された遺構などについては、雑草雑木の除草・伐採を行い、写真撮影及び外部委託による地形測量等による記録を行った。また、必要に応じて試掘坑を設けて試掘調査を行った。試掘坑の設定方法は第V区画を基本としたが、遺構の立地状況及び形状などに合わせて試掘坑を設定した。掘削した試掘坑における壁面実測及び土壌サンプル採取方法は、キャンプ地区と同様の方法で行った。また、写真撮影についても同様である。



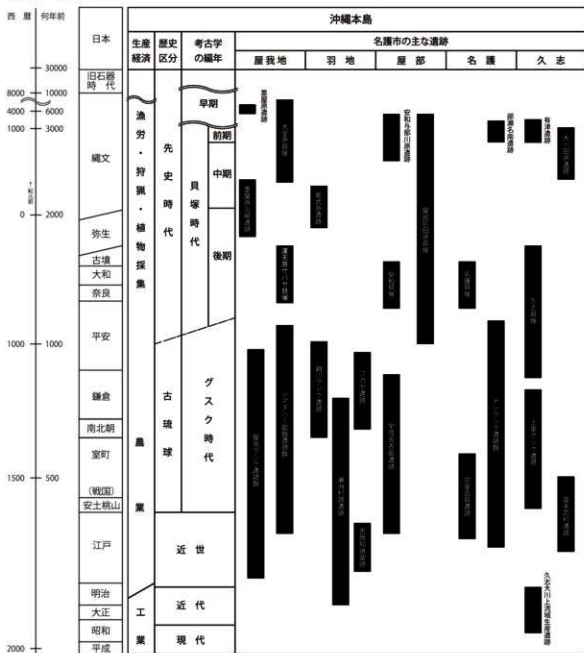
第11図 調査区位置図

第3節 時代区分について

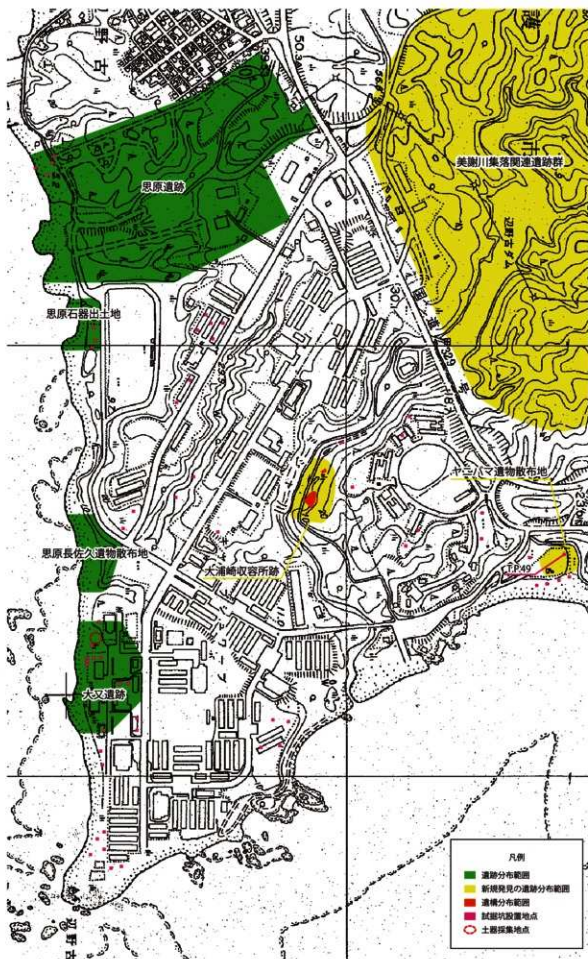
沖縄における先史時代・グスク時代の時代区分については、これまで色々な時代区分案が提起され議論されてきたが、未だ確立していない状況にある。そのため、本報告書では、従来の旧石器時代―貝塚時代（沖縄現行編年）―グスク時代―近世―近代―現代の時代名称で統一し、各時代の時期区分については、貝塚時代を早期―前期―中期―後期に区分した。この時代区分は、本市教育委員会がこれまで公に使用してきた区分であり、一貫性を持たせることで市民に理解しやすいものと思われることから今回採用するに至った。

なお、グスク時代は12世紀～島津侵攻(1609)まで、近世は島津侵攻後～琉球処分(1879)まで、近代は明治時代～沖縄戦(太平洋戦争)までとしている。

表3 時代区分表



※『名護市文化財調査報告-4 名護市の遺跡(2)分布調査報告』を基に作図



第 12 図 キャンプ地区における調査状況

第Ⅳ章 調査結果

キャンプ・シュワブにおいて埋蔵文化財が最初に確認されたのは、昭和 54 ～ 56 年度にかけて本市が実施した遺跡分布調査である。当初は思原遺跡のみであったが、昭和 57 (1982) 年度に実施したキャンプ・シュワブ内の文化財分布調査によって大又遺跡、思原長佐久遺物散布地、思原石器出土地の 3 遺跡が追加され現在に至る。今回の調査対象地域であるキャンプ・シュワブは、米軍基地内という特殊な環境であるため、これまで埋蔵文化財を含めた文化財調査を実施する機会に恵まれなかった。

今回の調査では、上記の周知の遺跡を含めた埋蔵文化財の分布状況やシュワブ訓練地区に分布しているとみられる宿道や美謝川屋取集落関連遺構、そして沖縄戦末期に設置された大浦崎収容所関連遺構の分布状況を確認することに主眼を置いて調査を実施した。

本章では、地区ごとに調査結果を報告する。

第 1 節 キャンプ地区

本地区は、国道 329 号より東側～南側にかけての海岸地域で、辺野古区において確認されている周知の遺跡が全て分布している地域である。今回の調査では、平成 19 ～ 20 年度にかけて踏査及び試掘調査を実施した。試掘調査を実施するにあたり、周知の遺跡を含め合計 58 箇所の試掘坑 (T.P.1 ～ 58) を設けて調査を進めた。

調査の結果、大浦ビーチにおいて設定した T.P.49 においてのみ遺物包含層が確認された。

遺物包含層からは、貝塚時代前期及び後期に属するものとみられる土器片が出土した。これらの先史時代の遺物と共に近現代のものとみられる陶磁器や鉄製品も出土していることから、遺物包含層は基地建設などによる攪乱を受けているものとみられる。当初は、基地建設の際に基地内の他の遺跡などから客土として持ち込まれた可能性も考えられたが、キャンプ・シュワブ及び辺野古区では未確認の貝塚時代前期に属する土器片が出土していることから、新発見の遺跡であると判断した。今回の調査では遺跡の詳細な性格などを把握することができなかったため、「ヤニバマ遺物散布地 (仮称)」として扱うこととした。

T.P.49 以外の試掘坑については、地山直上まで客土の堆積及び攪乱が確認された。これらのことから、当地区の大半は基地建設による地形改変の影響を受けているものと思われる。そのような状況の中で、大又遺跡で設定した T.P.5 より西側の地点で土器片が表面採集された。また、福地川の辺野古浄水場より下流において大浦崎収容所跡とみられる遺構を確認することができた。

以下、調査区内に分布する遺跡及び今回確認することのできた埋蔵文化財等についての概要及び調査結果について遺跡ごとに述べたいと思う。

1. 思原遺跡 (NKU)

所在地 : 辺野古思原
立地 : 海岸砂丘～丘陵地
時期 : 貝塚時代後期
主な遺物 : 土器、石製品
主な遺構 : ー

概 要 : 昭和 54 ～ 56 年度にかけて実施した遺跡分布調査によって発見された遺跡で、辺野古集落とキャンプ・シュワブが境をなす海岸砂丘及び丘陵地に分布するものとみられる。昭和 57 年 4 月に実施した試掘調査では、遺物包含層とみられる堆積層が確認されている。また、平成 20 年度に実施した開発に伴う緊急発掘調査では、排土から貝塚時代後期に属するものとみられる土器片が採取されている。

今回の調査では、昭和 57 年度の試掘調査において遺物包含層とみられる堆積層が確認された辺野古区との境をなすフェンス周辺の砂浜及び丘陵裾にて 4 箇所の試掘坑 (T.P.14 ～ 17) を設けて調査を実施したが、遺物包含層とみられる堆積層を確認することはできなかった。



1. 試掘地点遠景



2. T.P.15 掘削状況



3. T.P.15 堆積状況



4. T.P.16 堆積状況

写真 6. 思原遺跡試掘調査

2. 大又遺跡 (NKUfl)

へのがさきばる
所在地 : 辺野古長崎原

立 地 : 海岸～丘陵台地

時 期 : 貝塚時代後期

主な遺物 : 土器、石器

主な遺構 : -

概 要 : 昭和 57 年度に実施した試掘調査において発見された遺跡で、遺跡一帯はかつて辺野古でも一等水田であったようである。当時の報告によると、遺物包含層は約 15cm 程の厚さで台地縁辺部から砂浜にかけて堆積していたようだが、今回の試掘調査を行った試掘坑では遺物包含層を確認することはできなかった。但し、T.P.5 の西側の地点において土器片を地表面にて採集することができた。この場所が、昭和 57 年当時に確認された場所の可能性が高いが、二次堆積の可能性も否定できないために遺物包含層と断定

することは避けた。今回調査を実施した試掘坑（T.P.1～6、30、31）の様子から、遺跡の大半は基地建設に伴う土地改変の影響を受けている可能性が高い。しかし、土器片が採集された場所一帯は狭い範囲ではあるが旧地形を留めている可能性がうかがえるため、今後の調査に期待したい。なお、採集された土器片は貝塚時代後期に属するものとみられる。



1. 掘削作業風景



2. TP5 堆積状況



3. TP4 堆積状況



4. 埋戻し作業風景



5. 土器表面採集地点遠景



6. 土器表面採集地点近景

写真 7. 大又遺跡調査



第13図 昭和57年度当時の大又遺跡断面見取り図

3. 思原長佐久遺物散布地（仮称）

所在地： へのこうむいばる 辺野古思原

立地： 丘陵台地～海岸

時期： 貝塚時代後期

主な遺物： 土器

主な遺構： -

概要： 昭和 57 年度に実施した調査で発見された遺物散布地である。遺物散布地周辺は、かつては「ナガマタ」と呼ばれた生産性の高い水田であったようで、その水田地に施設を建設する際に出た排土を利用した土塁の中から、貝塚時代後期に属するとみられる土器片が昭和 57 年度の調査で採集されている。採集された土器片は、おそらく丘陵台地上で生活していた人々が湿地に破棄したものではないかと推測される。

今回の調査では、踏査のみを行い試掘等の掘削を伴う調査は実施しなかったが、基地建设によって遺物散布地及び周辺の地形は改変されているために、遺跡についても地形改変の影響を受けている可能性が高い。

4. 思原石器出土地（仮称）

所在地： へのこうむいばる 辺野古思原

立地： 海岸～丘陵台地

時期： 不明

主な遺物： 石器

主な遺構： -

概要： 旧グランド南側の海岸及び丘陵台地に所在する遺物出土地で、昭和 57 年度に実施した調査で発見された。その際に、海岸において撈乱層と自然堆積層の境から石器が出土したが、土器等の遺物は出土していない。

今回の調査では、アセラムイと呼ばれる小丘の西側の台地部において 3 箇所の試掘坑（T.P.18～20）を設けて調査を実施したが、遺物包含層を確認することはできなかった。試掘坑の様子から、基地建设による地形改変の影響を受けている可能性が高い。また、旧グランドの開発に伴う立会調査においても遺物包含層とみられる堆積層を確認することはできなかった。以上のことを勘案すると、昭和 57 年度の調査で石器が出土した海岸周辺及び丘陵台地裾に遺物包含層が残る可能性が高いと思われる。



1. 調査地近景



2. アセラムイ

写真 8. 思原石器出土地調査

5. ヤニバマ遺物散布地（仮称）

所在地： へのこしやふくちばる
辺野古下福地原
立地： 海岸砂丘
時期： 貝塚時代前期、後期
主な遺物： 土器
主な遺構： ー

概要： 平成20年度の調査で大浦ビーチ（地名：ヤニバマ）において確認された新発見の遺跡である。調査では、大浦ビーチにおいて6箇所の試掘坑（T.P.44～49）を設けて調査を実施した。そのうち、T.P.49において第Ⅵ・Ⅶ層より貝塚時代前期及び後期に属するとみられる土器片が出土した。しかし、各層とも近現代のものとみられる陶磁器片や鉄製品などが共存することから、基地建設などによる攪乱を受けているものとみられる。

今回の調査では遺跡の範囲及び詳細な性格などを把握するまでには至らなかったが、他の試掘坑の状況から、遺跡の範囲は砂浜までは及んでいない可能性が高いと思われる。



1. ヤニバマ遺物散布地遠景



2. T.P.49 掘削風景



3. T.P.49 堆積状況



4. T.P.49 近景

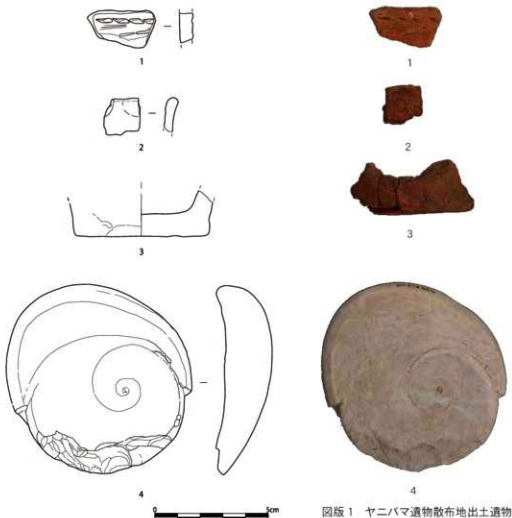
写真 9. ヤニバマ遺物散布地試掘調査

表 4. ヤニバマ遺物散布地出土土器観察表

調査番号	型式・年代	遺構	単位	位置 (m)		観察・分析	観察結果				出土数量 (個)	出土状況 (層)
				口数	深さ	調査	観察	形状	図入数	備考		
第1層	貝塚時代前期	深溝	口数	ー	ー	ー	地層の上部に土器片が散見し、その下部にヤニバマの土器片が散見する。	片：土器類	片：土器類	片：土器類	1.P.44	表層
第2層	貝塚時代前期	深溝	口数	ー	ー	ー	地層の上部に土器片が散見し、その下部にヤニバマの土器片が散見する。	片：土器類	片：土器類	片：土器類	1.P.44	表層
第3層	貝塚時代前期	深溝	口数	ー	ー	ー	地層の上部に土器片が散見し、その下部にヤニバマの土器片が散見する。	片：土器類	片：土器類	片：土器類	1.P.44	表層
第4層	貝塚時代前期	深溝	口数	ー	ー	ー	地層の上部に土器片が散見し、その下部にヤニバマの土器片が散見する。	片：土器類	片：土器類	片：土器類	1.P.44	表層
第5層	貝塚時代前期	深溝	口数	ー	ー	ー	地層の上部に土器片が散見し、その下部にヤニバマの土器片が散見する。	片：土器類	片：土器類	片：土器類	1.P.44	表層

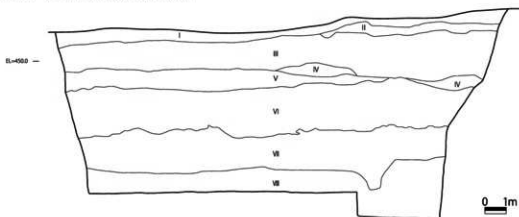
表 4. ヤニバマ遺物散布地出土土器観察表

発掘番号	種別	形状	寸法 (cm)	重量 (g)	出土 層	出土 位置	出土 時期	出土 状況	出土 理由	出土 場所
ヤニバマ	土器	ヤニバマ	—	—	—	—	—	—	ヤニバマの土器を出土した層に属する。下部の層に属する。高さが異なる。高さが異なる。高さが異なる。	1. 土器



図版 1 ヤニバマ遺物散布地出土遺物

第 14 図 ヤニバマ遺物散布地出土遺物



- I 層：にぶい黄褐色 (10YR7/4) 砂層。0.2 ~ 0.5cmの細礫を含む。表土。
 II 層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) やや固く締まる。0.2 ~ 0.5cmの細礫、砂利を含む。客土。
 III 層：明黄褐色 (10YR7/6) やや固く締まる。0.5 ~ 1.5cmの細礫、砂利を含む。客土。
 IV 層：赤色 (10YR5/8) 土層。粘質。1 ~ 10cmの礫を含む。客土。
 V 層：黄褐色 (10YR5/6) 砂層。1 ~ 5cmの軽石を含む。
 VI 層：にぶい黄色 (2.5YR6/4) 混砂土層。礫、貝殻を含む。
 VII 層：暗褐色 (10YR3/4)。礫、貝殻を含む。
 VIII 層：黄褐色 (10YR5/6) 砂層。礫、貝殻を含む。

第 15 図 TP49 東壁

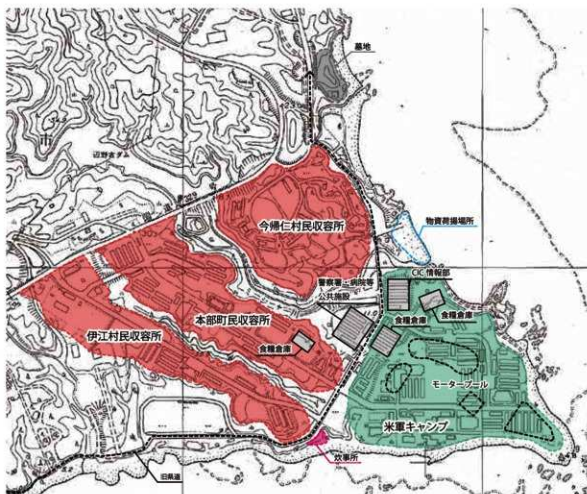
6. 大浦崎収容所跡

所在地： へのこしちやふくぢばる 辺野古下福地原
 立地： 丘陵地
 時期： 昭和 20 年頃
 主な遺構： 平場、通路跡、溜池？
 主な遺物： ー

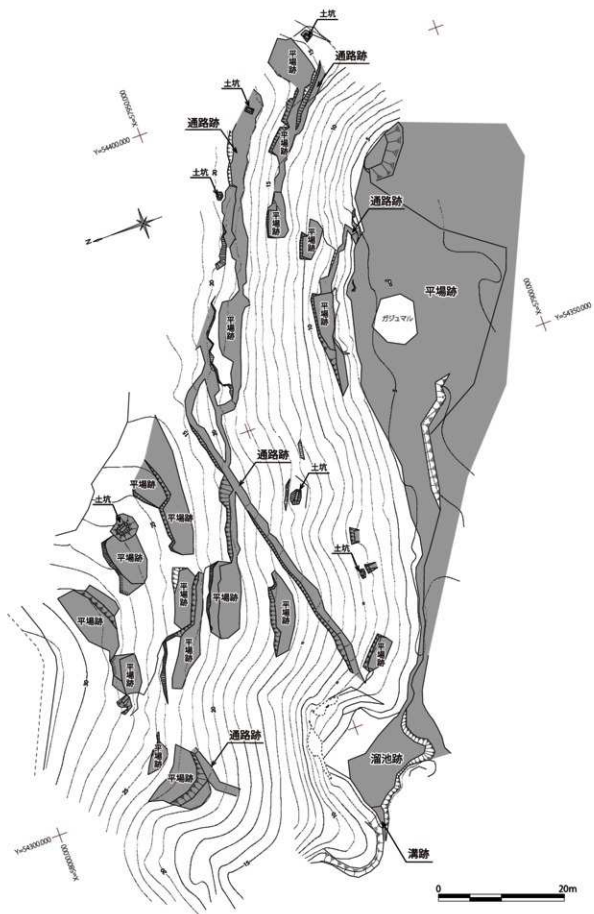
概要： 平成 20 年度の調査で発見された遺構群で、大浦崎収容所跡であるとみられる。大浦崎収容所は沖縄戦末期の昭和 20（1945）年 6 月下旬に、米軍によって小字下福地原及び思原に設置された捕虜収容所で、本部町、今帰仁村及び伊江村の住民が収容された。

今回の調査では、福地川流沿いにおいて丘陵斜面を削平して造成した平場とその裾に広がる平場、そして、平場間を結ぶ通路跡及び水場に利用されたとみられる溜池跡が確認された。これらの遺構群が確認された場所は、市史編さん室（現市史編さん係）が過去に実施した聞き取り調査において今帰仁村住民が収容されたエリアであることが分っている。

丘陵斜面を削平して構築されている平場は、2.5～4m 前後の奥行きを持ち、幅は 2～30m と様々で、土坑を伴うものもみられる。これらの平場は住民が寝起きをするためのテントを張った場所であったと思われる。また、平場を繋ぐようにして造成された通路跡は成人ひとりがようやく通ることのできる程度の幅の狭いものである。これらの遺構の西端では、水場として利用されたとみられる方形状に掘られた溜池跡が確認された。



第 16 図 大浦崎収容所捕虜収容状況



第 17 図 大浦崎收容所跡平面図



1. 平場跡



2. 丘陵斜面にみられる透構面



3. 通路跡



4. 通路跡



5. 丘陵斜面削平地点 (平場跡から)



6. 溜池跡遠景

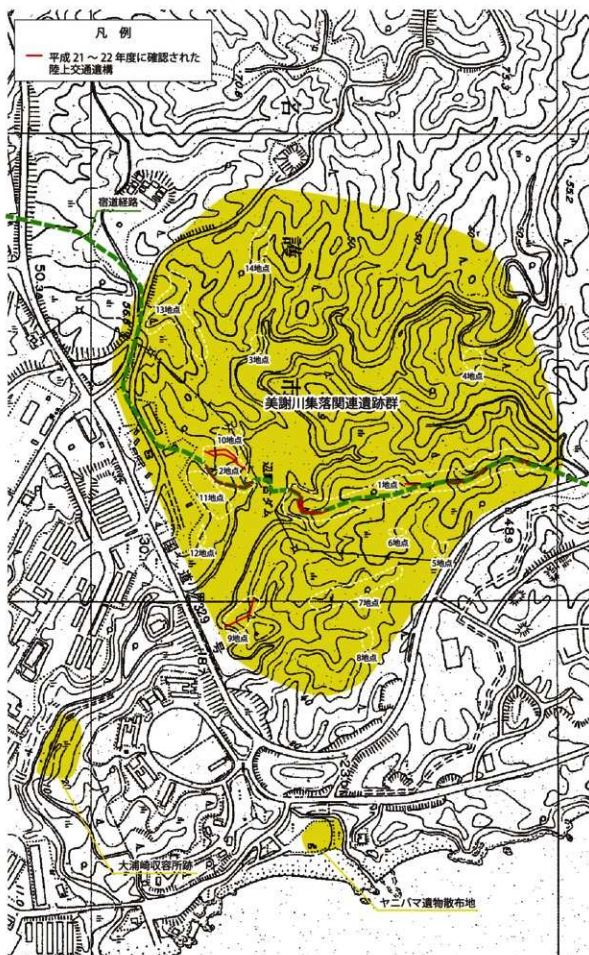


7. 溜池跡近景



8. 溜池跡から延びる溝跡

写真 10. 大浦崎収容所跡



第 18 図 シュワブ訓練地区における調査実施状況（美謝川集落関連遺跡群）

第2節 シュワブ訓練地区

本調査区では、平成21～23年度にかけて踏査及び試掘調査を実施した。踏査の結果、14箇所の地点で生産関連遺構や陸上交通遺構などが確認された。これらを確認された順に1～14地点とし地点名を付した。そのうちの6地点及び7地点において試掘調査を実施した(T.P.59～61)。今回確認することのできた遺構の大半は、美謝川集落取集落との関連性が高いと考えられることから、「美謝川集落関連遺跡群（仮称）」としてまとめた。

以下、遺構ごとの概要及び調査結果について各地点ごとに述べたいと思う。

1. デークニヤマ周辺の陸上交通遺構（1地点）

琉球王府時代に主要幹線道として整備された国頭方東海道跡であるが、戦後の基地建設に伴う車道整備によって分断され、宿道跡が断続的に遺存する。本地点では、計5基の分断された宿道跡を確認した。宿道は丘陵地を削平・造成して構築されるが、全体的に凹凸が多くみられる。ダム湖周辺では、急勾配の坂道となり、階段状の岩盤が露頭している部分もみられる。また、坂道の手前辺りでは宿道を含め複数の道跡が密集して確認された。



1. 宿道跡検出状況



2. 宿道跡検出状況



3. 宿道跡検出状況



4. 宿道跡検出状況

写真 11. デークニヤマ周辺の陸上交通遺構

2. フクチビラの陸上交通遺構（2地点）

宿道及び里道跡とみられる遺構で、3条の陸上交通遺構が確認された。西側の1条は1地点へと続く宿道跡で、北側はダム湖に水没している。残りの2条については、大正時代初期に整備されたと伝えられている開削道（農道）跡等の可能性が考えられる。



1. 開削道跡検出状況



3. 宿道跡検出状況



2. 開削道跡検出状況

写真 12. フクチビラの陸上交通遺構

3. 上福地原の猪垣跡（3 地点）

ダム湖畔の斜面に沿って構築された土塁が 1 基確認された。土塁にはテーブルサンゴが備えられていることから、猪垣として利用されたとみられる。



1. 猪垣跡検出状況



2. テーブルサンゴ埋設状況

写真 13. 上福地原の猪垣跡

4. 上福地原の平場跡（4 地点）

辺野古ダムへと注ぐ福地川沿いの東側丘陵地に残る平場である。平場の性格などは判然としないが、この辺りはシチャスカイクンと呼ばれ、『邊野古誌』掲載の「美謝川居住配置図」に前許田の屋号をみることができることから、住居跡の可能性も考えられる。



1. 平場跡遠景



2. 平場跡近景

写真 14. 上福地原の平場跡

5. デークニヤマの生産関連遺構（5～8地点）

国道 329 号沿いにみられる盆地状低地や谷間を利用した耕地跡などの生産関連遺構で、5～8 地点において確認された。

【5 地点】 7 地点北西側の池の対岸に残る平場で、丘陵斜面を削平して造成される。平場は、池に向かって緩やかに下る。また、平場の東側では池に向かって延びる溝状の浅い窪みが 2 条確認された。平場の北側から西側にかけては雛壇状に削平され、西側の平場直上の段では成人ひとりが通れる程度の道跡があり、北へ向かって延びる。



1. 平場跡遠景



2. 平場跡近景



3. 平場跡近景



4. 里道跡

写真 15. デークニヤマの生産関連遺構群（5 地点）

【6 地点】 谷間を削平して構築された耕地跡とみられる遺構で、南側から北側に向かって緩やかに下る細長い3段の平場跡と、歪曲した尾根が形作る狭い谷間を利用した平場跡が残る。互いに谷間斜面を削平し、耕作面を造成している。

南側から北側の盆地状低地に向かって緩やかに下る細長い三段の平場は段々畑状に平場が造成される。東側及び南側法面には、成人ひとりが通れる幅狭な道跡が平場を囲むようにしてL字状に延びる。また、西側法面には雛壇状の段差が確認できる。その他、平場の南東側及び南西側にも谷間斜面を削平した弧状の地形が段違いで2箇所確認できるが、段々畑状の平場に比べて急勾配である。



1. 耕作地跡



3. 耕作地跡周囲の道跡



2. 耕作地跡

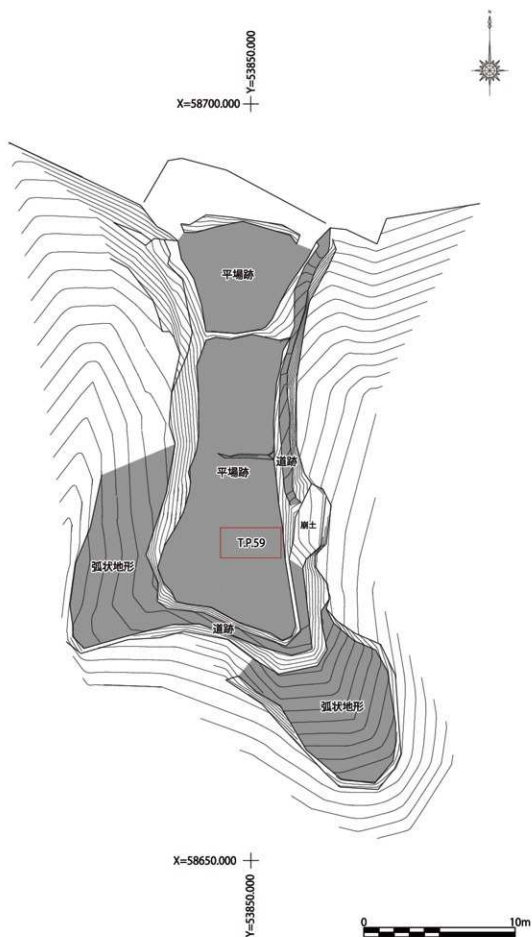


4. 耕作地跡



5. 堆積状況

写真 16. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (6 地点)



第 19 図 テークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (6 地点)

【7 地点】 丘陵の盆地状低地及び谷間を利用した生産関連遺構で、今回の調査で確認された耕地跡とみられる遺構の中で最も規模の大きなものである。平場の東側では、約 50cm 間隔の畝跡が 23 列確認できた。この畝跡は、除草・伐採後に目視することができたことから、比較的新しい時代のものと推測される。この平場において 2 箇所の試掘坑（T.P.60～61）を設けて試掘調査を行った結果、畝跡を構成する旧耕作土よりも下層で水田に利用された可能性のある土壌が確認された。なお、平場の北西側には湿地及び池が広がる。畝跡が確認された地点の南側からは、谷間に沿って幅 6m 前後の平場がみられる。この平場では、切土等によってコの字状に囲われた平場や斜面に掘られた掘削坑などの遺構が確認されたが、平場を含めそれらの遺構の構築目的や機能は判然としない。



1. 耕作地跡



2. 畝跡



3. 耕作地跡堆積状況



4. 谷間沿いの平場跡

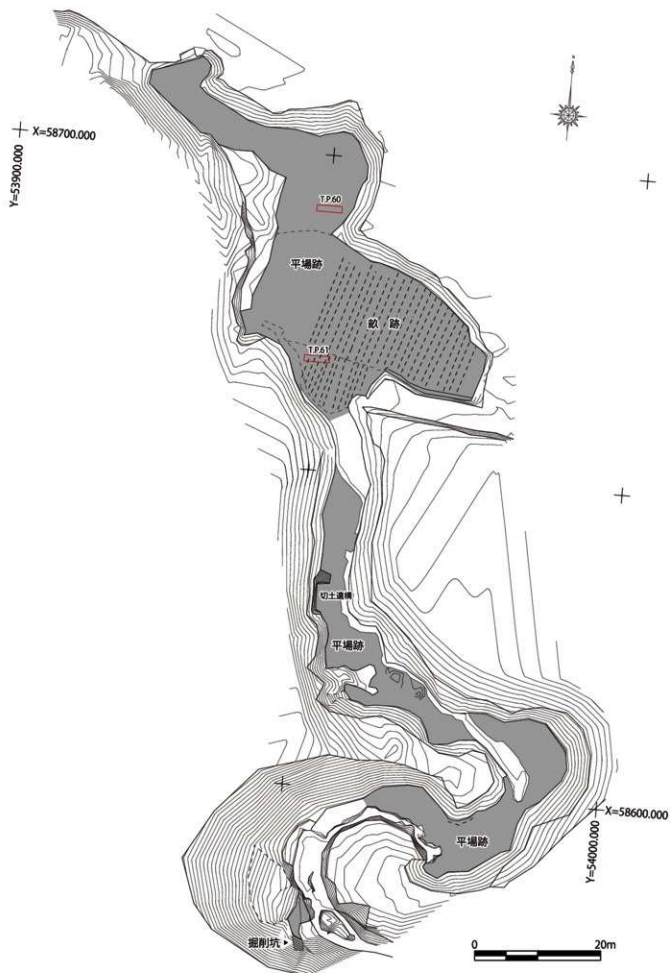


5. 谷間沿いの平場跡にみられる切土遺構



6. 谷間沿いの平場跡にみられる掘削坑

写真 17. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群（7 地点）



第20図 テークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (7地点)

【8 地点】 谷間を削平して構築された耕地跡とみられる遺構で、2 段の平場が確認された。平場の間には約 30cm 程の段差があり、その境目には幅約 30cm の溝が走る。上段の平場は、南西側から北東側に向かってゆるやかに下る。南西側の法面の両隅にはそれぞれ溝が確認できる。また、平場の東西両法面沿いにも溝がみられ、西側のものも前述した平場の境目を走る溝と連結する。下段の平場では、西側から東側へ向かって緩やかな傾斜が認められ、その東側では焼土を伴う炉跡とみられる遺構が確認された。



1. 生産関連遺構群遠景



2. 平場跡



3. 谷間斜面を削平した平場跡



4. 平場跡周囲に掘られた溝跡



5. 平場跡周囲を掘られた溝跡

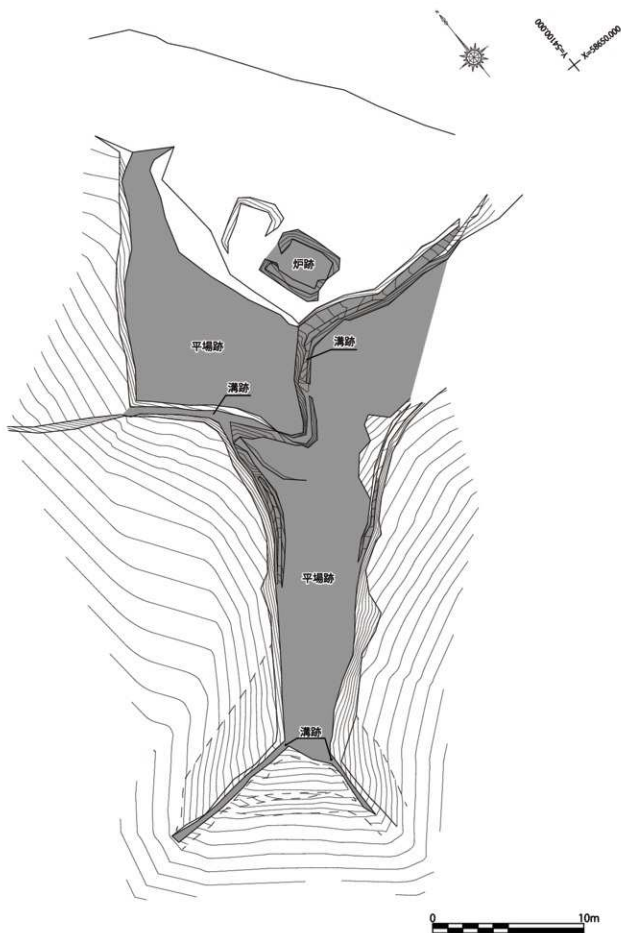


6. 炉跡

写真 18. デークニヤマ周辺の生産関連遺構群

6. 下福地原の陸上交通遺構（9 地点）

宿道から分岐したとみられる里道跡で、辺野古ダム南東側丘陵斜面に残る。戦後の基地及びダム建設により破壊・水没しているとみられ、今回の調査ではその一部が確認された。



第21図 デークニヤマ周辺の生産関連遺構群 (8地点)



1. 里道跡



2. 里道跡（奥にダム湖が見える）

写真 19. 下福地原の陸上交通遺構

7. フクチビラ周辺の土塁跡及び溝状遺構（10地点）

フクチビラの陸上交通遺構（2地点）の西側に位置する遺構で、東西2基の土塁を確認することができた。東側の土塁は、斜面の勾配に並行して構築される。土塁の南側には幅約50cmの道状の浅い窪みが並走する。西側の土塁は、丘陵の稜線に沿うようにして構築される。土塁の東側には溝が並走するようにして掘削され、土塁の南端からL字状にカーブし西側を流れる沢へ向かって斜面を下っていく。溝状遺構の法面には、テーブルサンゴが埋め込まれていることから、猪垣のような機能を有していた可能性も考えられる。また、溝の法面には法面保護のために積まれたとみられる石積も確認できた。土塁の東側には幅約1.5mの道状の平坦面があり、沢の斜面まで延びる。



1. 東側土塁跡



2. 西側土塁跡

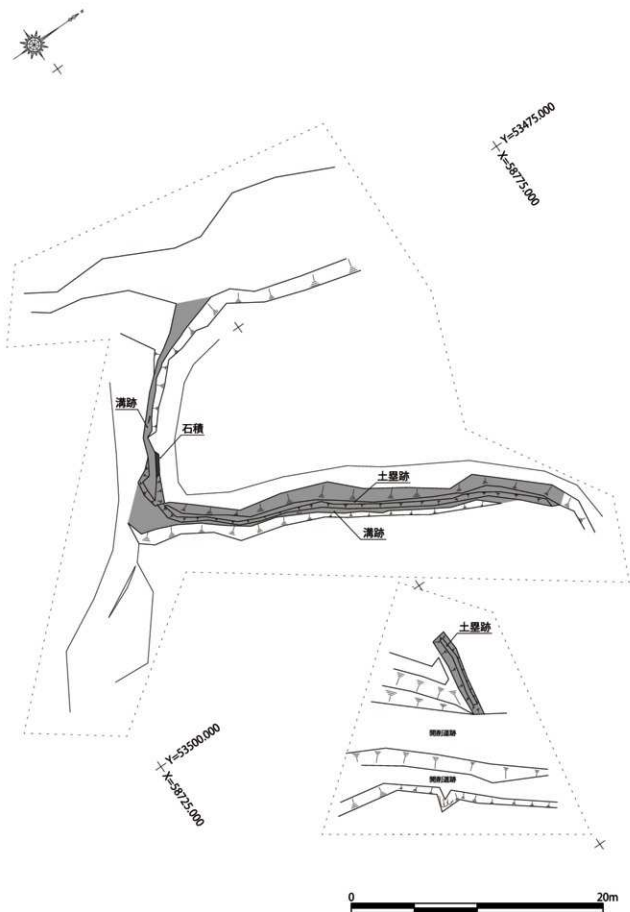


3. テーブルサンゴ埋設状況



4. 石積遺構

写真 20. フクチビラ周辺の土塁及び溝状遺構



第 22 図 フクチピラ周辺の土塁及び溝状遺構

8. フクチビラ周辺の生産関連遺構（11地点）

フクチビラの陸上交通遺構（2地点）の東側の谷間において確認された、耕地跡とみられる生産関連遺構である。遺構は谷間を削平して構築され、平場跡や土塁跡及び溝状遺構等が確認された。平場跡は、遺構の西側（平場A）と中央部（平場B）で確認され、周囲には道跡及び土塁跡が構築される。平場Aは、中央部がやや窪みながら平場Bの方へ向かって緩やかに下っていく。平場Aの北東側からは、溝状の窪みが平場Bに向かって延びる。平場Bは、その溝状遺構と繋がることやその形状からクムイや水田の可能性も考えられるが、試掘調査等を実施していないためその性格は判然としない。この平場Bの北側には平場を囲むようにして土塁（土塁A）が構築される。この土塁Aは元々U字状に構築されていたとみられるが、その一部は基地造成の影響を受け崩壊している。また、土塁Aの外側には道状の浅い窪みが並走する。遺構群の東側には、平場Bから続く沢跡とみられる溝が北側斜面沿いにダム湖に向かって延びる。この沢跡の法面には護岸状に構築された野面積みの石積もみられる。また、沢跡に沿うようにして道状の平坦面が造成され、その南側法面縁（高さ約1.7m）には土留のために構築されたとみられる石積が一部残存する。また、石積より上部の斜面を囲むようにして土塁（土塁B）が構築される。この土塁Bでも外側に道状の浅い窪みが並走するが、東側の斜面に沿って沢跡へ下っていく部分については溝状の深い窪みになるため、排水路として構築されたと考えられる。この土塁Bは、土塁Aの外側の道状遺構まで延び、その部分の土塁Aは切り通されている。土塁B及び石積間の空間の機能等は判然としないが、傾斜が急であるため耕作地としての利用は難しいと思われる。また、本地点で確認された土塁跡の構築目的及びその性格は判然としない。

※クムイ＝自然または人工的に造成された溜池。小堀。



1. 護岸状石積遺構



2. 護岸状石積遺構



3. 土留の石積遺構



1. 土塁 A



2. 土塁 B



3. 土塁 B 及び溝状遺構



4. 土塁 A の切り通し部分



5. 道跡

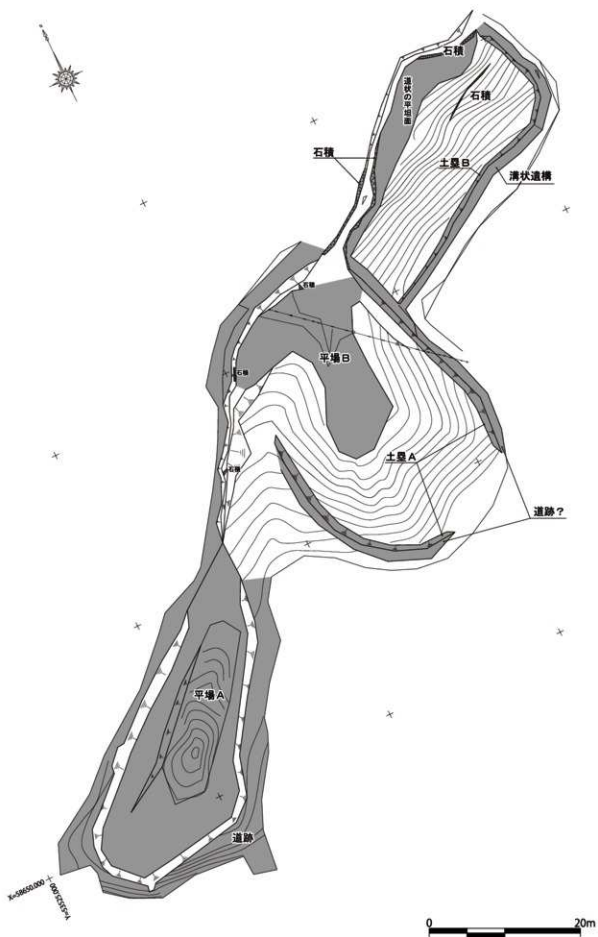


6. 道跡



7. 平場 A 及び道跡

写真 22. フクチビラ周辺の生産関連遺構群 (2/2)



第 23 図 フクチビラ周辺の生産関連遺構群

9. 思原の陸上交通遺構及び猪垣跡(12地点)

かつての里道跡とみられるが、基地建设によってその大部分が破壊されている。今回の調査で確認できたのは約22mの距離で、路面の所々に石灰岩が露頭している。また、遺構の北側には遺構に沿うようにして高さ約1mの土塁が構築されている。この土塁の法面には崩落したとみられるテーブルサンゴが確認できることから、土塁は猪垣として利用されていたものとみられる。

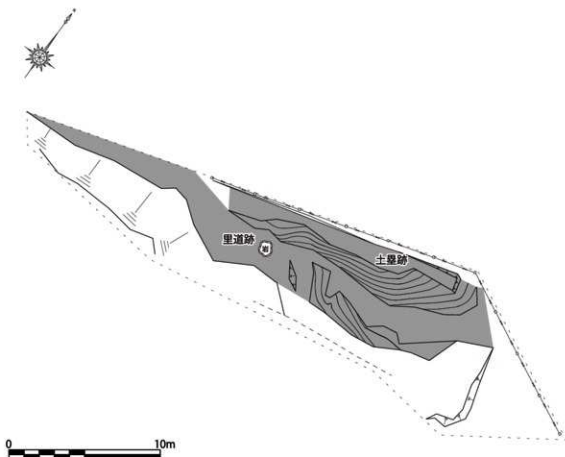


1. テーブルサンゴ確認状況



2. 里道跡

写真 23. 思原の陸上交通遺構及び猪垣跡



第24図 思原の陸上交通遺構及び猪垣跡

10. 青年地（セイネンチ）周辺の生産関連遺構及び陸上交通遺構（13地点）

セイネンチと呼ばれる旧耕作地の東側に位置する里道跡と土塁を伴う削平地及び平場跡である。青年地を通る道沿いには、谷間を利用した耕地跡とみられる平場跡が残る。平場跡の東側法面を4m程登ると、成人ひとりが通れる程度の里道跡とみられる平坦面が確認された。平場跡は南側から北側へ向かって緩やかに下っていく。南端には1.5m程度の高低差の段差があり、その先は沢となる。沢との境となる段差部分には土留の石積がみられる。平場跡の北側約30mの地点には、沢沿いに整備された里道跡が残る。この里道跡は、沢沿いの斜面を削平して造成されていて、幅は2～3mと比較的幅の広い里道跡である。前述の平場から延びる沢と交差する場所は暗渠となる。この沢沿い及び里道跡沿いには、土塁とそれに伴う溝状遺構が確認できるが、その構築目的や用途は判然としない。但し、溝状遺構は排水路とみられる。



1. 道跡



2. 土留状石積遺構



3. 土塁跡及び溝状遺構



4. 里道跡



5. 土塁跡及び溝状遺構

写真 24. セイネンチ周辺の生産関連遺構群及び陸上交通遺構（1/2）



1. 斜面切土状況



2. 土塁跡及び溝状遺構

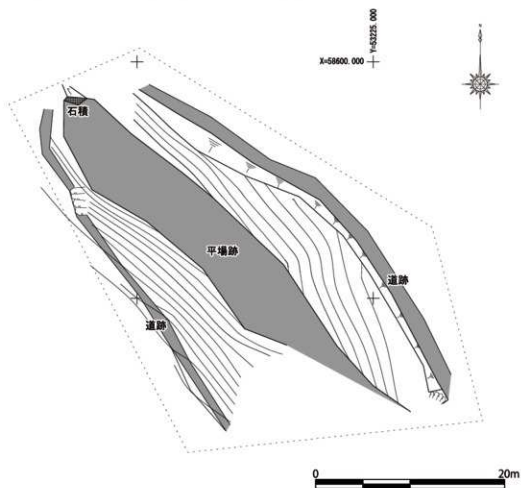


3. 道跡

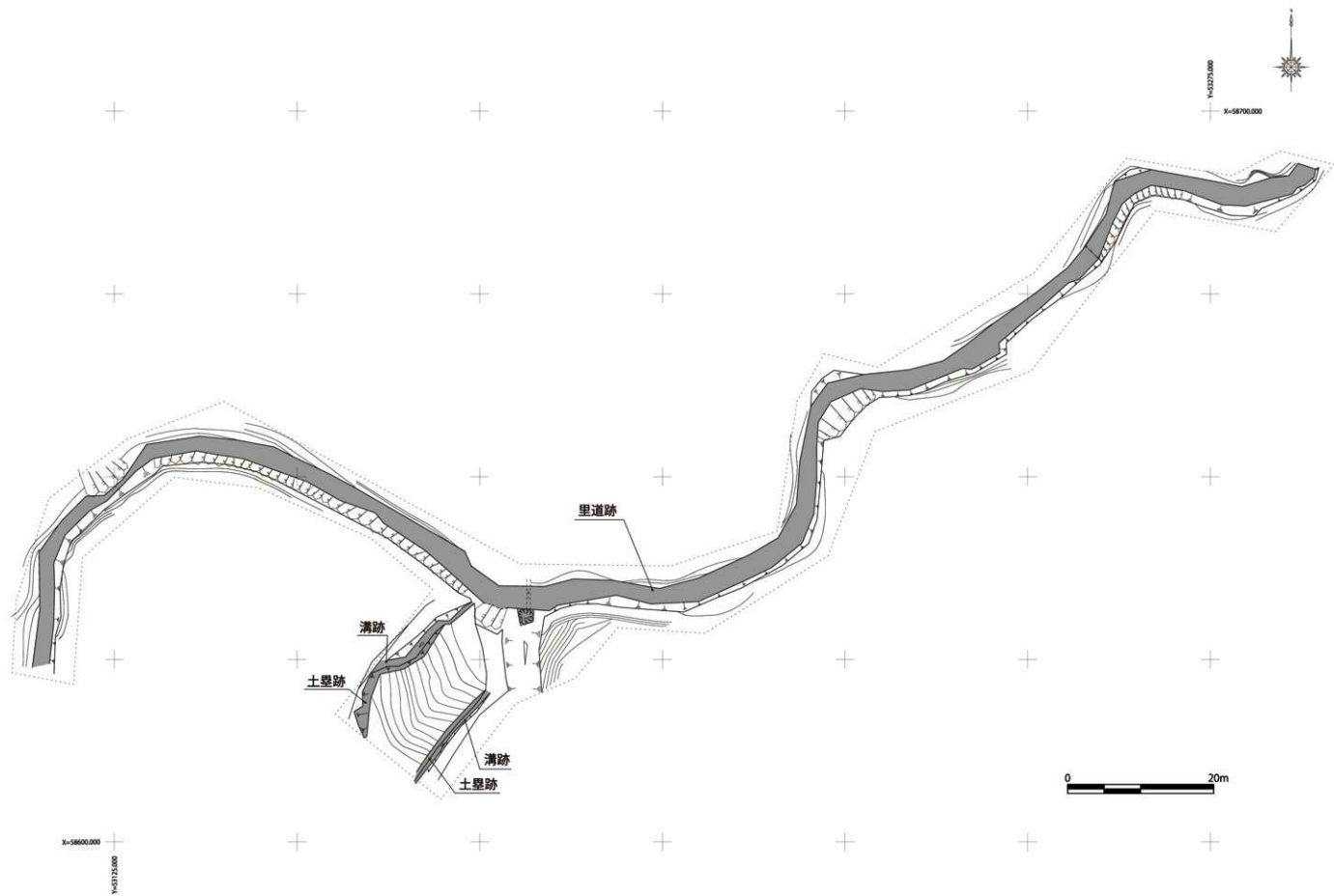


4. 土塁跡

写真 25. セイネンチ周辺の生産関連遺構群及び陸上交通遺構 (2/2)



第 25 図 セイネンチ周辺の生産関連遺構



第 26 図 セイネンチ周辺の陸上交通遺構

11. ナガスジ周辺の平場跡（14 地点）

ナガスジと呼ばれる山筋周辺の谷間で確認した平場である。谷間の斜面を削平し、幅約 8m の平場を造成する。平場は蛇行しながら約 50m 程東側へ延び、その先は約 2m 落ちて沢跡が確認できる。平場の西端には約 1m の段差があり、その中央は約 30cm の幅で開削されている。この箇所より平場の中央を通るようにして、沢跡まで流水痕を確認することができることから、降雨時は沢になるものと考えられる。今回の調査では踏査のみであったため、平場の用途等は判然としない。また、平場の西側法面には、幅 1m 前後の通路状の平坦面が 2 条確認できたが、その用途も判然としない。

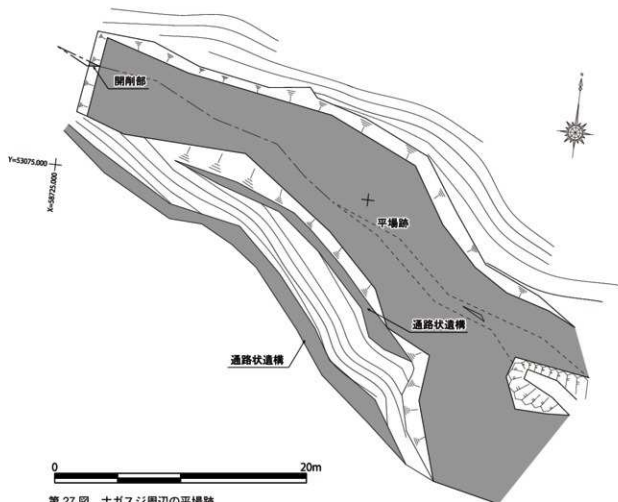


1. 段差開削状況



2. 法面にみられる通路状遺構

写真 26. ナガスジ周辺の平場跡



第 27 図 ナガスジ周辺の平場跡

第V章 総括

市内遺跡詳細分布調査の一環として、平成 19 ～ 23 年度にかけて実施したキャンプ・シュワブ内文化財調査におけるキャンプ地区及びシュワブ訓練地区の状況について記述してきた。前章までに述べた調査成果及び今後の課題等を整理して、本報告の総括としたい。

第 1 節 キャンプ地区における先史時代（貝塚時代）遺跡

キャンプ・シュワブにおいて、これまでに把握されている先史時代（貝塚時代）に属する周知の遺跡は、思原遺跡、大又遺跡、思原長佐久遺物散布地、思原石器出土地の計 4 遺跡で、その全てがキャンプ地区の海岸線沿いに分布している。今回の調査では、これらの周知の遺跡を含めた埋蔵文化財の分布状況を確認するために、平成 19 ～ 20 年度にかけてキャンプ地区において 58 箇所の試掘坑（T.P.1 ～ 58）を設けて試掘調査を実施した。

調査の結果、大浦ビーチにおいて新たにヤニバマ遺物散布地（仮称）を発見することができた。今回確認された遺物包含層は残念ながら攪乱を受けていたが、辺野古区で初めて貝塚時代前期に属する土器が確認された。今回の調査では遺跡の範囲及び性格を把握するまでには至らなかったが、ヤニバマ遺物散布地（仮称）の発見は辺野古区のみならず当市の歴史を知る上で貴重な成果といえる。

周知の遺跡の範囲内において設けた試掘坑では遺物包含層を確認することはできなかった。その理由として、地山直上まで客土による埋め土や地層の攪乱が確認されることから、基地建設による地形改変の影響を受けている可能性が高いことが考えられる。但し、大又遺跡において貝塚時代後期に属するものとみられる土器が表面採集された。この土器の帰属時期は遺跡の時期と符合するが、周辺の地形が基地建設による改変を受けていることを考慮すると、単純に遺物包含層の露頭であると断定することは控えたいと思う。今回の調査では、調査期間及び範囲等に制限があったために、土器表面採集地点での試掘調査を実施するに至らなかった。

また、周知の遺跡の範囲外に設けた T.P.49 以外の試掘坑では、周知の遺跡における試掘坑と同様に基地建設の影響を受けた客土を確認した。

以上のように、今回の調査ではヤニバマ遺物散布地の新発見及び大又遺跡において遺物包含層とみられる地層の露頭が確認されたが、期間や範囲などの制限により詳細な情報を得ることができなかった。但し、大又遺跡については、遺跡内にて実施した試掘調査の結果から遺跡の大半は消失しているものと考えられる。

第 2 節 美謝川集落関連遺跡群

1. 陸上交通遺構

平成 21 ～ 23 年度にかけての調査において、シュワブ訓練地区において近世～近現代までに利用されていたとみられる陸上交通遺構が確認された。なかでも、宿道跡（国頭方東海道路跡）を確認することができたことは、今回の調査の大きな成果のひとつといえる。宿道跡の大半は、戦後の基地建設等によって造成された車道や辺野古ダムによって破壊・水没しているために断続的に残存する程度であるが、当時の形状を比較的残しているとみられ、平成 9（1997）年に国道 329 号改良工事に伴い移築された辺野古の一里塚を含め、当時の交通史を知るための貴重な資料である。

また、宿道跡の他にも里道や大正時代に整備された農道開削道等の大小の陸上交通遺構が確認された。これらの遺構も宿道跡同様、辺野古の先人達の生活を知る上で貴重な資料である。

2. 生産関連遺構

キャンプ・シュワブにおける過去の調査において、キャンプ地区では水田遺構等の生産関連遺構が確認されていた。そして、平成 21 ～ 23 年度にかけての調査においては、シュワブ訓練地区において耕作地跡などの生産関連遺構を確認することができた。今回の調査で確認された生産関連遺構は、谷間や盆地状低地などを利用した耕作地跡やそれに付帯する道跡（ハルミチ・ヤマミチ）や土塁跡（猪垣など）などで、辺野古地区における土地利用や生産活動をうかがうことのできる遺構である。これまで確認されたキャンプ・シュワブ内の水田跡以外の耕作地跡では、植栽痕などの耕作の痕跡を示す遺構は確認されていなかったが、今回デークニヤマで確認された耕作地跡（7 地点）において初めて畝跡を確認することができた。

今回確認された生産関連遺構は、美謝川集落に起因するものと考えられることから、遺構を構築・利用していた時期は、明治～基地接収前の昭和 31（1956）年頃までとみられる。

第 3 節 大浦崎収容所跡

キャンプ・シュワブが所在する辺野古区は、沖縄戦末期から戦後にかけて大浦崎収容所が設置された地域である。平成 20 年度の調査において、福地川下流域においてその大浦崎収容所跡とみられる遺構群を確認することができた。このことは、今回の調査における大きな成果のひとつである。

今回確認された収容所跡は、今帰仁村民が収容されたとみられる場所で、収容所設営当時はほとんど立木も無い不毛に等しい荒地で、収容された住民達は米軍により配布されたテントを設営するために階段状の地形を整地しながら雨露をしのぐだけのテント小屋を設営して暮らしていたようである。今回確認することのできた遺構群は、収容所稼働当時の形状を留めているものとみられ、当時の収容所の様子を知る上で県内でも数少ない貴重な資料であるといえる。

おわりに

今回の調査では、上記のように新たにヤニバマ遺物散布地（仮称）をはじめ、大浦崎収容所跡や美謝川集落関連遺跡群が確認されたことが最大の成果として挙げられる。これらの成果は、辺野古区に限らず名護市、本島北部地域の歴史文化的環境を考察する上で貴重な資料になるものである。今回の調査では、他の調査との兼ね合い等により調査期間及び範囲等に制限があったため、詳細な調査を実施することのできない所もあったが、これまで局所的にしか調査を実施していなかったキャンプ・シュワブにおいて文化財調査を実施することができたことは評価することができるものである。

今回の調査の結果、周知の遺跡及び今回確認された遺構群において基地建設による影響を受けていることが確認できたことから、関係機関と協力して他地域に分布する文化財と同様に適切な保護対策を講じていかななくてはならない。

《参考文献》

- ・『名護市の遺跡(2) 分布調査報告書』名護市文化財調査報告 4 名護市教育委員会 1982
- ・『辺野古遺跡調査記録』名護博物館 1982
- ・『わがまち・わがむら』名護市史・本編 11 名護市教育委員会 1988
- ・『辺野古の一里塚』名護市教育委員会 1994
- ・『語り継ぐ戦争 第1集』名護市史叢書 1 名護市 1995
- ・辺野古区編纂委員会(編)『辺野古誌』辺野古区事務所 2002
- ・『名護市の自然』名護市動植物総合調査報告書 2003 名護市教育委員会
- ・『民俗Ⅲ 民俗地図』名護市史・本編 9 名護市教育委員会 2003
- ・『沖縄県史 各論編 第2巻 考古』沖縄県教育委員会 2003
- ・『思原遺跡2 地区－シュワブ(H20)倉庫等地区新設造成工事に伴う緊急発掘調査－』名護市文化財調査報告書 20 名護市教育委員会 2010
- ・『思原遺跡1 地区－キャンプ・シュワブ内工場地区建設事業に伴う緊急発掘調査－』名護市文化財調査報告 21 名護市教育委員会 2011

報告書抄録

ふりがな	しないいせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ 1							
書名	市内遺跡詳細分布調査報告書 I							
副書名	キャンプ・シュワブ内文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	名護市文化財調査報告							
シリーズ番号	第 22 集							
編著者名	宮城 智浩							
発行機関	名護市教育委員会 文化課 文化財係							
所在地	〒905-0021 沖縄県名護市東江 1-8-11 (名護博物館内) TEL 0980-53-3012							
発行年月日	2013 (平成 25) 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / '	° / '			
やにばま遺物 散布地ほか	おきなわけん なごし 沖縄県 名護市 あびのこ 字辺野古	47209				2007.08.01 ～ 2012.03.31	踏査対象： 約 2,114,000 m ² 試掘面積： 244 m ²	市内遺跡詳 細分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
やにばま遺物 散布地	遺物散布地	貝塚時代前期、 後期		—		土器		新規発見の 遺跡
うむいばらいせき 思原遺跡	遺物包蔵地	貝塚時代後期		—		—		遺物包含層 確認できず
うみまたいせき 大又遺跡	遺物包蔵地	貝塚時代後期		—		土器		試掘調査で は遺物包含 層確認でき ず
うむいばらながさく 思原長佐久遺 物散布地	遺物散布地	貝塚時代後期		—		—		踏査のみ実 施
うむいばらせきしやう 思原石器出土 地	遺物散布地	不明		—		—		遺物包含層 確認できず
おおのうさきしやう 大浦崎収容所 跡	戦争遺跡	近代		平場跡、通路跡、 溜池跡ほか		—		新規発見の 遺跡
みじやがわしやうらん 美謝川集落関 連遺跡群	生産遺跡 交通遺跡	近代～現代		宿道跡、耕地跡、 猪垣跡、土塁など		—		新規発見の 遺跡
要 約	本報告書は、平成 19～23 年度にかけて市内遺跡詳細分布調査の一環として実施した、キャンプ・シュワブ内における文化財調査の成果をまとめたものである。本調査においてヤニバマ遺物散布地をはじめ大浦崎収容所跡及び美謝川集落関連遺跡群の 3 遺跡を新たに確認することができた。しかし、これまで知られていた 4 遺跡については、基地建設等の開発による土地改変の影響を受けているものとみられる。							

名護市文化財調査報告書-22

市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

－ キャンプ・シュワブ内文化財調査報告書 －

発行年 2013年 3月29日
発行 名護市教育委員会
編集 名護市教育委員会 文化課 文化財係
〒905-0021 沖縄県名護市東江1-8-11（名護博物館2F）
TEL 0980-53-3012

印刷 沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL 098-889-5513
